

第七稿 大岡川（新田開発と河川改修の歴史）

大岡川は、横浜の心臓部を流れる延長約14km、流域面積約35km²の2級河川です。横浜市庁舎の目の前を流れており、横浜を象徴する川の一つとなっています。

第七稿は、前編として、大岡川を源流から探検しつつ、吉田新田の歴史をはじめとした河川改修の沿革について紹介します。

1 大岡川とは

大岡川は円海山（標高153m）を源流として、磯子区氷取沢市民の森を流れて日野川と合流し、南区で中村川と堀割川に分流します。本流は、中区の日ノ出町、野毛の市街地を流れ、みなとみらい21で横浜港に注ぎます。



A 河口付近（新市庁舎・さくらみらい橋から望む）



B 南区（桜まつり・大井橋から望む）



C 港南区（青木橋上流）



D 源流（円海山・氷取沢）



引用・参考) A, C, D: 河川企画課所蔵

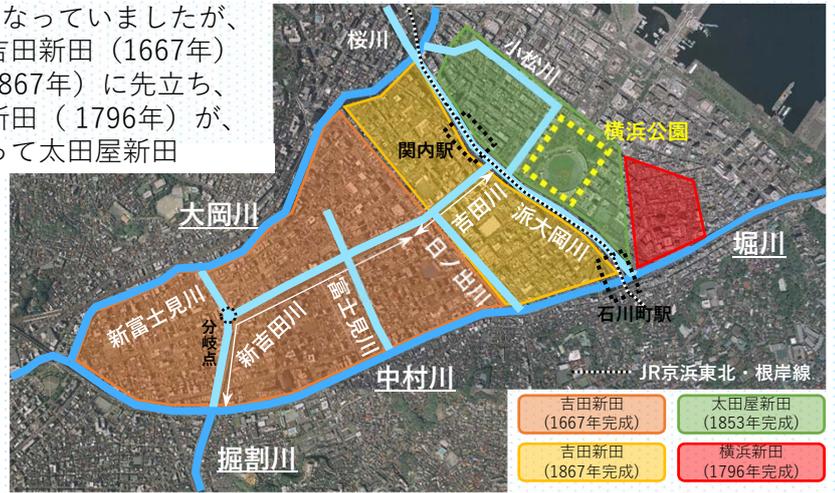
B: 南区（桜まつり・大井橋から望む）, 横浜市南区地域振興課所蔵

その他イラスト: 河川企画課所蔵

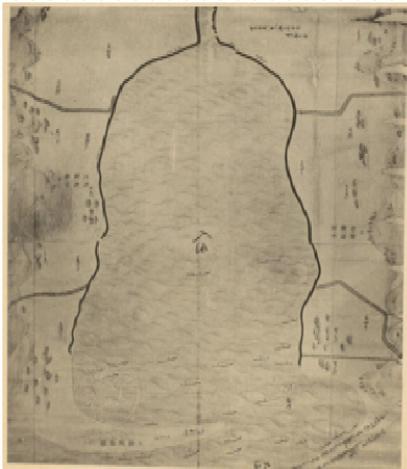
2 下流域における新田開発 ～消えた8つの河川～

およそ350年前、中区と南区の周辺は入海となっていました。木材・石材商人の吉田勘兵衛が中心となり、吉田新田（1667年）を開墾しました。その後の吉田新田の埋立（1867年）に先立ち、現在の中華街の周辺で横浜村民によって横浜新田（1796年）が、現在の相生・住吉の周辺で太田屋徳九郎によって太田屋新田（1856年）が開墾されました。

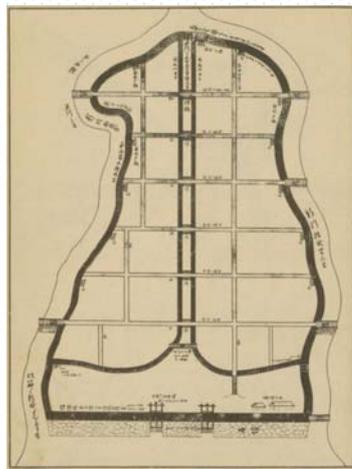
また、現在の伊勢佐木町は中村川と大岡川に挟まれたエリアですが、かつては小松川、派大岡川、吉田川、新吉田川、新富士見川、富士見川、日ノ出川、桜川と8つの河川が存在していました。これらは、明治5年（1872）から昭和52年（1977）の間に埋め立てられて消滅し、現存しているのは、大岡川、掘割川、中村川、堀川と4河川のみとなっています。



E 新田開発及び開削した8河川的位置図



F 吉田新田の開墾前図



G 吉田新田の開墾後図



H 横浜村并近傍之図

2-1 消えた河川の今（跡地）



大通り公園（吉田川・新吉田川）

地下は市営地下鉄ブルーライン（伊勢崎長者町駅・阪東橋駅）



日ノ出川公園（日ノ出川の一部）



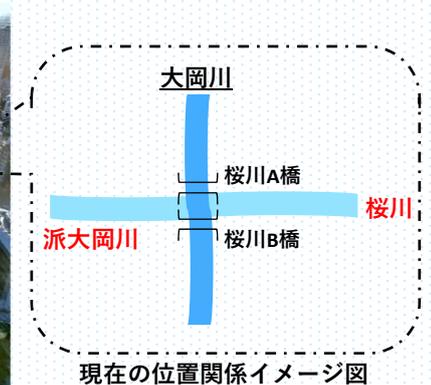
新横浜通り：桜川新道（桜川）



富士見川公園（新富士見川）



JR根岸線・桜川新道（派大岡川・桜川）



現在の位置関係イメージ図

引用・参考) E: 国土地理院ウェブサイト (<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>) をもとに河川企画課作成

F, G: 吉田勘兵衛良循 [著], 吉田家 [出版], 「横浜吉田新田図絵」, 昭和10年

H: 横浜中央図書館所蔵, 「横浜村并近傍之図 (請求記号e-088)」

その他の上記写真: 河川企画課所蔵

2-2 開削と埋立の変遷

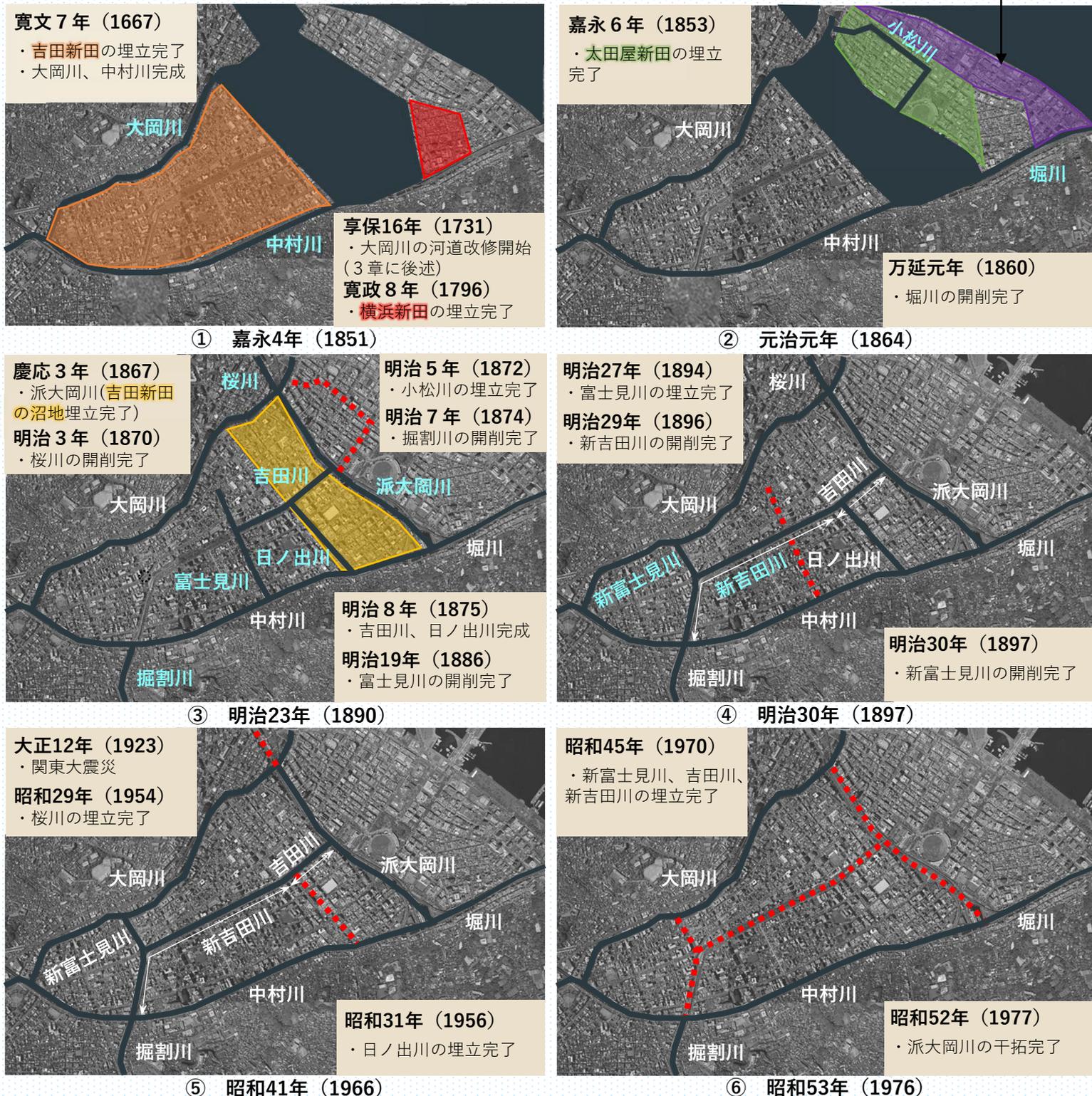
時は明治。横浜では、人口増加や都市化によって物流が増大し、舟運が必要となりました。そのため、河川の開削が盛んに行われ、これらの河川は主に舟路として、その機能を果たしていました。

しかし、明治37年（1904）に初の路面電車の運営が開始されると、横浜の舟路の需要に陰りが見え始めます。大正12年（1923）の関東大震災を受けた横濱復興計画案では、「新吉田川ヲ埋築シ」街路を作る計画が組まれていました。また、終戦後の昭和21年（1946）には、横浜大空襲の残骸や瓦礫の投棄処分箇所として、桜川や日ノ出川が指定されており、舟路としての河川の需要の低下を推察することができます。

さらに、鉄道をはじめとした陸上交通の発達を利用価値の低下に拍車をかけ、河川の埋立が続きました。高度経済成長期には、工場から排出された汚水や汚物等によって河川が汚染されたことから、景観上や衛生上からもマイナスであるとされ、これらを埋め立てて新たな都市の基盤整備が行われることになりました。

【外国人居住地の防犯柵としての機能】

横浜開港後、幕府は日本人浪士による外国人殺傷事件が相次いだことを受け、舟運の便はもちろん、居留地保護の関係から、危険人物の取締の必要上、関内（外国人居住地）と関外を隔離するために堀川の開削を行いました。



I 開削と埋立の変遷概略図（地形図は当時のものを未踏襲） 青字：新規開削河川、赤破線：埋立河川

引用・参考）I：『田邊 徳子，古谷 勝則 横浜市大岡川・中村川下流域における運河の発展と衰退，ランドスケープ研究77（5），2014』及び国土地理院ウェブサイト（<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>）をもとに河川企画課作成

文章：『田邊 徳子，古谷 勝則 横浜市大岡川・中村川下流域における運河の発展と衰退，ランドスケープ研究77（5），2014』横浜開港資料館，「開港のひろば 第95号」，平成19年1月31日発行

J 開削と埋立の理由まとめ

	開削		埋立	
	時期	理由	時期	理由
大岡川	1667	吉田新田の開発	－	現存
中村川	1667	吉田新田の開発	－	現存
小松川	－	不明	1872	衛生面の向上
堀川	1860	外国人居留地の保護	－	現存
派大岡川	1867	吉田新田の沼地の開発	1977	舟路の停止、新たな都市の基盤整備
桜川	1870	舟路の開拓	1954	舟路の停止、瓦礫の処分
掘割川	1874	舟路の開拓	－	現存
吉田川	1875	舟路の開拓	1970	舟路の停止、衛生面の向上
日ノ出川	1875	舟路の開拓	1956	舟路の停止、瓦礫の処分
富士見川	1886	舟路の開拓	1894	新富士見川の開削の代替
新吉田川	1896	舟路の開拓	1896	舟路の停止、新たな都市の基盤整備
新富士見川	1897	舟路の開拓	1897	舟路の停止、新たな都市の基盤整備

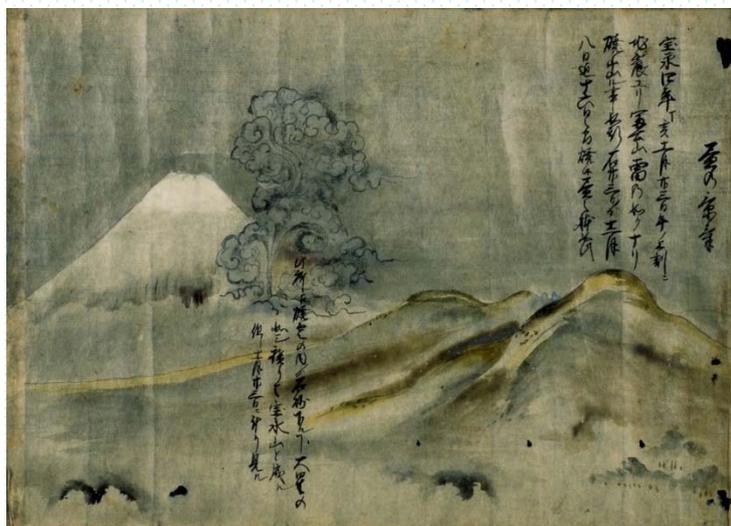
3 大岡川改修の歴史

3-1 宝永の富士山噴火

大岡川の河道は、かつて「九十九曲り」といわれるほど蛇行しており、周辺の村々では洪水に見舞われることが度々ありました。特に宝永4年（1707）に起きた富士山噴火では、市内全域に降灰が8～16cm積もったと言われています。この影響は耕作への直接的被害に留まらず、降灰が雨風に流されて河川に流入した結果、河床が上昇し、流域下流部における氾濫の危険性がさらに高まりました。

これを契機に、大岡川中下流域の村々では、大岡川の改修工事を幕府に要望し、享保16年（1731）に工事が行われました。工事の内容は、川幅の拡幅と河床の掘削、蛇行していた流れの直線化であり、河床に堆積した降灰を河口から海へとスムーズに排出させることを目的としていました。

このような河道改修工事は、同時期に鶴見川や帷子川水系でも幕府によって実施されており、江戸周辺の村々で実施された総合的な治水政策の一環だと考えられます。



K 富士山宝永噴火絵図 昼乃景気



L 富士山宝永噴火絵図 夜乃景気

3-2 大岡川筋組合による維持管理

幕府による改修工事によって、治水環境が改善されると、次なる課題としてその現状の維持が求められるようになりました。大岡川筋組合に属する上大岡村・下大岡村・中里村・弘明寺村・別所村・最戸村・久保村・井土ヶ谷村・蒔田村・太田村・中村・吉田新田の12ヶ村は、共同して工事後の川筋を維持するための取決め文書を作成しました。

その内容は、以下のようになっています。

- ・ 日常的に見廻りし、現況を把握すること
- ・ 洪水等で河道に残された流木等の障害物は、所在する村々へ連絡して速やかに撤去すること
- ・ 河道から2間（3.6メートル）以内の幅の土地には、竹木等の植物が繁茂しないようにすること

3-3 関東大震災～現在

大正12年（1923）の関東大震災によって、横浜市は大きな被害を受け、大岡川水系の護岸や橋梁は壊滅状態となりました。これを受け、河口から観音橋では、大正13年から昭和5年にかけて、震災復興事業で護岸工事・浚渫が実施されました。この際、ほぼ垂直な石積み護岸が整備され、現在の大岡川の原型がつけられています。

一方、昭和36年代後半のJR根岸線の延伸により、大岡川上流域や日野川流域の都市化が急速に進み、その結果、流域の保水機能の低下等によって、昭和36年6月・昭和41年6月の洪水などの水害が多発するようになりました。これに対し、上流域である大井橋から天谷橋間では、昭和36年から昭和43年にかけて、台風による災害復旧事業で護岸工事が実施されました。また、都市化の進展状況から河道拡幅が困難な中下流域では、大岡川上流域および日野川からの洪水を全量カットし根岸湾に流す、全長約3.6kmの大岡川分水路が昭和56年に完成しています。これらの改修により大岡川分水路から下流では、概ね時間降雨量50mm規模の洪水に対する治水安全度を満足しています。

また、天谷橋から上流については、横浜市の施工区間になっており、護岸工事・橋梁新設・架替工事の実施で概ね時間降雨量30mmに対応する改修工事を実施しました。さらなる市街化の進展に対応するため、平成元年度からは下流の2級河川大岡川改修事業と整合を図りつつ、時間降雨量50mmに対応する改修工事に着手しています。



大岡川水系の河川整備の状況



M 長者橋下流の石積み護岸・道路の壊滅状況



N 一本橋下流の石積み護岸の崩壊状況



O 観音橋下流の板柵護岸破壊・道路の沈下状況



Q 坂下橋下流の石積み護岸の崩壊状況



P 前田橋下流の石積み護岸の崩壊状況

M～Q 関東大震災による大岡川水系の被害状況

引用・参考) M～Q: 横浜市中心図書館所蔵、『横浜市河川 震災写真帖』
文章: 大岡川水系河川整備計画

吉田新田の開発工事の詳細は、その資料の多くが関東大震災によって消失しましたが、僅かに残された吉田新田開発後絵図などからその様子を推察することができます。吉田新田の周囲には、新田を囲むように堤＝堤防が築かれています。釣鐘型の吉田新田の場合、堤は2つに分かれています。

～工事の規模～

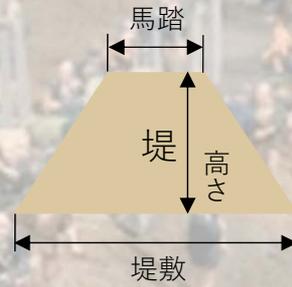
① 釣鐘型の右辺（大岡川沿い）と左辺（中村川沿い）

馬踏：2.7m・高さ：4.5m・堤敷：9.0m
全長：3,191m(大岡川)・2,433m(中村川)

② 「潮除堤」：海側に面する底辺
馬踏：5.4m・高さ：5.4m・堤敷：23.4m
全長：1,859m

※総計：7,484m

こうした堤の築造に要した土砂は、計174,527m³（横浜スタジアム約5.7杯分）と莫大な量になっており、野毛の天神橋や、山手側の大丸山、横浜村から伸びた砂州などから船などによって運搬されました。



堤の概要図



R 開発後の吉田新田

～工事の方法～

工事には周辺村民などが動員されていたことから、農業が比較的手持ち無沙汰な短期間に、大量の人員を動員して堤を築造したものと考えられています。

工程は、大岡川の河口（釣鐘型の頂点）から開始し、大岡川と中村川に沿ってそれぞれ堤防を延長していき、最後に海に面した潮除堤で締め切って、吉田新田の範囲を確定したものと推察されます。

こうして堤が完成した後は、さらに約10年をかけて、新田内部の埋め立てや排水、水門や用水施設の整備などが進められ、段々と耕地へと変化していきました。



S 吉田新田の堤の普請作業風景想定模型

T 関連年表

明暦2年
(1656)

◆ **新田開発はじまる**
新田開発を幕府から許可され、工事に着手する。

明暦3年
(1657)

◆ **新田開発失敗**
大雨のため、潮除堤が破壊され、工事が挫折する。

万治2年
(1659)

◆ **新田開発再開**
再び新田開発が許可され、2月11日から工事を再開する。

寛文7年
(1667)

◆ **新田完成**
新田開発が完成する。

◇ **新田への移住開始**
寛文2年(1662)

延宝2年
(1674)

◆ **吉田新田への検地施行**
土地の広さや、米のとれ高の調査が行われる。

◇ **吉田新田と命名**
寛文9年(1669)

貞享3年
(1686)

◆ **吉田勤兵衛死去**
7月26日に76歳で死去する。



次稿でも、大岡川分水路など、大岡川について引き続き紹介していきます！